

渥美半島表浜でツノメガニと ナンヨウスナガニ（スナガニ科）を確認

西 浩孝*

Records of the ghost crab *Ocypode ceratophthalmus* and *O. sinensis* (Ocypodidae)
from the Pacific Coast of Atsumi Peninsula, Aichi Prefecture, central Japan

Hiroataka Nishi*

はじめに

渥美半島の遠州灘沿岸には、砂浜海岸が伊良湖岬から浜名湖まで続いており、「表浜」と呼ばれている。海から砂浜、海浜植物の生える砂丘、海食崖周辺の風衝低木林と続くエコトーンが維持された、貴重な海岸である（静岡県・愛知県, 2015）。表浜はアカウミガメの産卵地として知られるほか、海浜植物や海浜性の昆虫などの豊かな生物相が見られる（長谷川・蟹江, 1992；豊橋市自然史博物館, 2011；長谷川ほか, 2011；静岡県・愛知県, 2015；豊橋市, 2016）。自然海岸の減少した愛知県下において、良好な環境が維持されている地域であり、遠州灘沿岸のうち伊良湖岬から豊橋市の中央付近までの海岸は三河湾国定公園（1958年4月指定）に含まれている。

スナガニ属 *Ocypode* のカニ類は、砂浜海岸の代表的な生物として知られ、日本沿岸からは5種が報告されている。日本本土では、これまで温帯性のスナガニ *Ocypode stimpsoni* が優占し、熱帯・亜熱帯性のツノメガニ *Ocypode ceratophthalmus* やナンヨウスナガニ *Ocypode sinensis* は南九州沿岸や紀伊半島沿岸、相模湾で記録されることがあるとされてきた（三宅, 1983など）。近年、南方系のツノメガニやナンヨウスナガニが北に分布を広げていることが報告されている（和田,

2017；若林, 2018；渡部ほか, 2018）。

表浜にはスナガニが生息していることが知られているが（愛知県, 1985；豊橋市自然史博物館, 2011, ただし後述するように写真は別種である）、南方系のツノメガニ及びナンヨウスナガニは愛知県からの記録は見当たらない（愛知県, 1985；中島, 1997, 2005）。このたび、愛知県田原市と豊橋市の表浜でツノメガニとナンヨウスナガニが採集されたため、報告する。

標本および確認状況

1. ツノメガニ *Ocypode ceratophthalmus*

標本：1個体（第1図；豊橋市自然史博物館甲殻類資料 TMNH-C-47）、雄、甲幅 16.4 mm、愛知県豊橋市高塚海岸、2018年10月1日、西 浩孝採集；1個体（TMNH-C-48）、雄、甲幅 15.4 mm、愛知県豊橋市高塚海岸、2018年10月25日、西 浩孝採集。

ツノメガニは、大型個体では眼の先に角状突起が伸びるためスナガニとの区別は容易だが、小型個体においては角状突起がないためスナガニと混同されることがある。渡部ほか（2018）によると、ツノメガニとスナガニとは、次の点で識別できる。すなわち、ツノメガニの中小型個体の甲面腸域には1対の茶色の斑紋があるのに対し、スナガニではその部位は白抜きになっ

* 豊橋市自然史博物館. Toyohashi Museum of Natural History, 1-238 Oana, Oiwa-cho, Toyohashi, Aichi 441-3147, Japan. E-mail: nishi.hiroataka@gmail.com

原稿受付 2018年12月14日. Manuscript received Dec. 14, 2018.

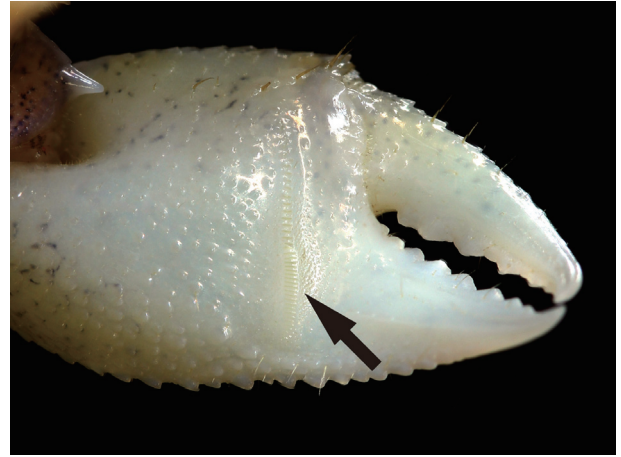
原稿受理 2019年1月4日. Manuscript accepted Jan. 4, 2019.

キーワード：甲殻類, カニ, スナガニ属, 砂浜海岸.

Key words : Crustacea, crab, ghost crab, sandy beach.



第1図. ツノメガニ *Ocypode ceratophthalmus*.
TMNH-C-47, 豊橋市高塚海岸.



第2図. ツノメガニの鉗脚掌部の顆粒列 (矢印).
TMNH-C-48.

ている。また、大鉗脚の内面にある顆粒列がスナガニでは均等であるのに対し、ツノメガニでは下部に向かって密になってゆき、下部では再び間隔が広がる(第2図)。ツノメガニは、三重県(若林, 2017)、伊豆半島や房総半島(渡部ほか, 2018)など、北方へ分布を広げている。現在の北限は茨城県である(若林, 2018)。

今回採集された個体はいずれも小型であり、未成熟と考えられる。表浜のツノメガニ個体群は、この地域で繁殖しているのではなく、南方の個体群から放出された幼生が定着したものである可能性がある。

豊橋市自然史博物館(2011)は、表浜に生息する「スナガニ」を写真で紹介している。今回改めて確認したところ、表紙と30ページ下の写真(豊橋市小島～細谷海岸, 2010年9月21日, 長谷川道明撮影)は、採集していないため確実な同定ではないが、同時に撮影された同一個体の写真において甲面腸域に1対の斑紋がある特徴(渡部ほか, 2018)から、ツノメガニである。さらに、36ページにスナガニとして掲載されている写真(豊橋市小島海岸, 2010年7月27日, 著者撮影)も、甲面の模様からツノメガニである。

2. ナンヨウスナガニ *Ocypode sinensis*

標本: 1個体(第3図; TMNH-C-49), 雄, 甲幅6.8 mm, 愛知県田原市恋路ヶ浜海岸, 2017年9月5日, 吉川博章採集。

写真: 愛知県田原市大草海岸, 2010年9月13日, 長谷川道明撮影。

ナンヨウスナガニは、大鉗脚の内面にスナガニやツノメガニに見られるような顆粒列が見られない。ミナ

ミスナガニ *Ocypode cordimanus* に非常に類似するが、ミナミスナガニでは眼窩下縁に明瞭な切れ込みがあるのに対し、ナンヨウスナガニではその部分に切れ込みがないことなどで識別できる(渡部ほか, 2018)。ナンヨウスナガニは、淡路島の西岸、兵庫県の日本海沿岸(和田・和田, 2015)、和歌山県沿岸(渡部ほか, 2012)、三重県(締次, 2017)、伊豆半島や房総半島(渡部ほか, 2018)など、北方へ分布を広げている。また、若林(2018)はミナミスナガニまたはナンヨウスナガニであると考えられるスナガニ属の1種を宮城県から報告している。

今回採集された個体は非常に小型であり、明らかに未成熟である。ツノメガニ同様、表浜のナンヨウスナガニ個体群も南方の個体群から放出された幼生が定着したものである可能性がある。

豊橋市自然史博物館(2011)において、30ページ上にスナガニとして掲載されている写真(湖西市白須賀海岸, 2010年10月7日, 長谷川道明撮影)は、甲面の模様からナンヨウスナガニである。

和歌山県和歌山市の和歌川河口や白浜町の海岸においては、ツノメガニやナンヨウスナガニが増えるとともに、スナガニが数を減らし、あるいは姿を消したことが報告されている(淀ほか, 2006; 渡部ほか, 2012; 和田, 2017)。これは、肉食性傾向が強いツノメガニによってスナガニの新規加入個体が捕食されたためではないかと考えられている(和田, 2017)。今後、表浜におけるスナガニ類の種組成の変化に注目したい。



第3図. ナンヨウスナガニ *Ocypode sinensis*,
TMNH-C-49, 田原市恋路ヶ浜海岸, 吉川博章撮影.

謝 辞

奈良女子大学の和田恵次名誉教授には、写真によりスナガニ類を同定していただいた。豊橋市自然史博物館の吉川博章主任学芸員には資料の収集に協力していただき、長谷川道明学芸専門員には写真を提供していただいた。琉球大学理学部の佐藤大義氏及び豊橋市在住の中島徳男氏、豊橋市自然史博物館の松岡敬二館長には、スナガニ類の生息状況等の情報をいただいた。以上の方々に厚くお礼申し上げる。

引用文献

- 愛知県, 1985. 愛知県の自然環境—1984. 愛知県, 278 p.
- 長谷川道明・蟹江 昇, 1992. 豊橋市表浜海岸の海浜性甲虫類. 豊橋市自然史博物館研究報告, (2): 13–24.
- 長谷川道明・坂部あい・谷中亮太・本多洋平・白井和紗・石田英寛・松山晃大, 2011. 表浜海岸における絶滅危惧種ヤマトマダラバッタの分布について. 豊橋市自然史博物館研究報告, (21): 1–6.
- 三宅貞祥, 1983. 原色日本大型甲殻類図鑑 (Ⅱ). 保育社, 大阪, 277 p.
- 中島徳男, 1997. 三河湾・遠州灘産海産蟹類目録. 自費出版, 40 p + 27 pls.
- 中島徳男, 2005. 遠州灘の蟹類. 自費出版, 36 p + 10 pls.
- 締次美穂, 2017. ナンヨウスナガニを三重県から初記録. 南紀生物, 59(1): 91–92.
- 静岡県・愛知県, 2015. 遠州灘沿岸海岸保全基本計画. 静岡県・愛知県, 127 p. <http://www.pref.shizuoka.jp/kensetsu/ke-410/kouwan27/documents/ensyu1.pdf> <http://www.pref.shizuoka.jp/>

[kensetsu/ke-410/kouwan27/documents/ensyu2.pdf](http://www.pref.shizuoka.jp/kensetsu/ke-410/kouwan27/documents/ensyu2.pdf) (2018 年 11 月 30 日閲覧)

- 豊橋市, 2016. 豊橋の自然探検～守ろう！とよはしネイチャースポット 2016～. 豊橋市, 豊橋, 161 p.
- 豊橋市自然史博物館, 2011. 豊橋市自然史博物館ガイドブック ⑧表浜の自然～渥美半島の成り立ちと砂浜の生きもの～. 豊橋市自然史博物館, 豊橋, 63 p.
- 和田恵次, 2017. 日本のカニ学: 川から海岸までの生態研究史. 東海大学出版部, 平塚, 173 p.
- 和田年史・和田恵次, 2015. ナンヨウスナガニ (スナガニ科) の日本海沿岸からの初記録. *Cancer*, 24: 15–19.
- 若林郁夫, 2017. 三重県におけるスナガニ属の生息状況. 南紀生物, 59(2): 184–187.
- 若林郁夫, 2018. 茨城県および宮城県におけるスナガニ属カニ類の生息記録. 南紀生物, 60(1): 59–62.
- 渡部哲也・淀 真理・木邑聡美・野元彰人・和田恵次, 2012. 近畿地方中南部沿岸域におけるスナガニ属 4 種の分布—2002 年と 2010 年の比較—. 地域自然史と保全, 34(1): 27–36.
- 渡部哲也・淀 真理・木邑聡美・野元彰人・和田恵次, 2018. 砂浜性スナガニ類の関東以南太平洋岸における分布. *Cancer*, 27: 7–16.
- 淀 真理, 渡部哲也, 中西夕香, 酒野光世, 木邑聡美, 野元彰人, 和田恵次, 2006. 南方系種を含むスナガニ属 3 種の和歌山市における生息状況: 2000–2003 年. 日本ベントス学会誌, 61: 2–7.